

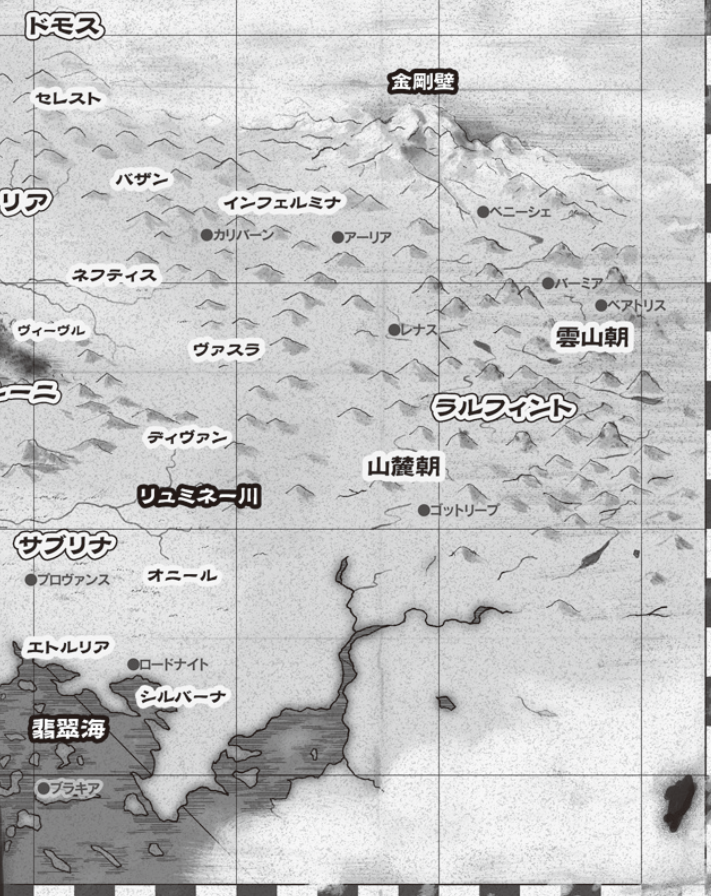


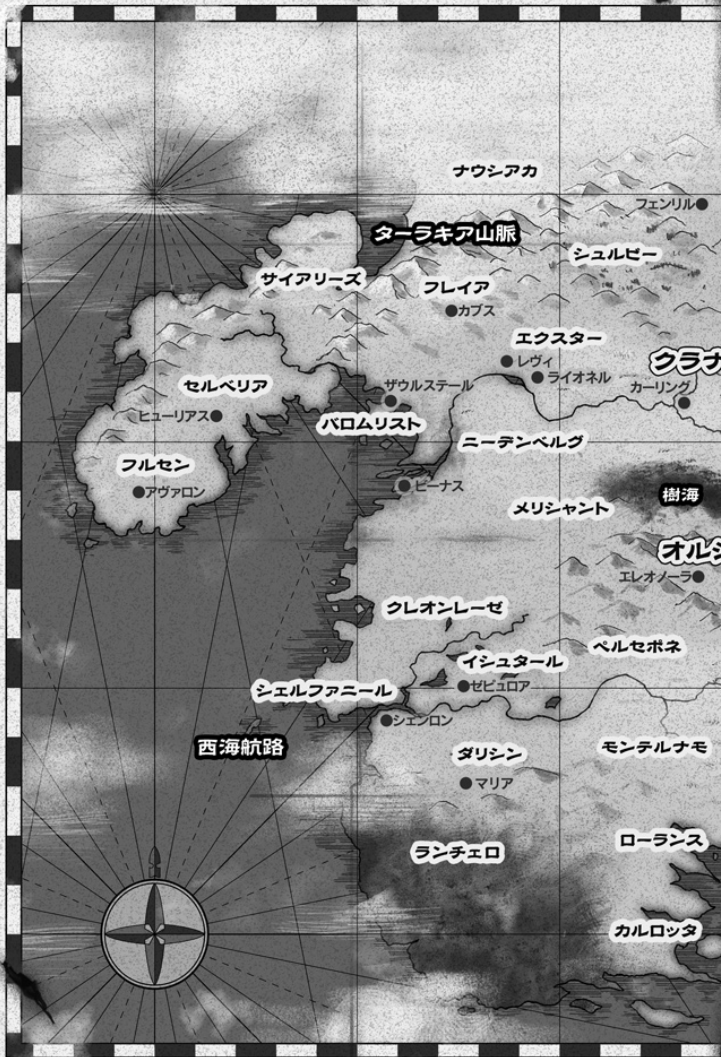
ハレムキャッスル
Harem
Castle

小説 竹内けん 挿絵 Hiviki N

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界







登場人物紹介

Characters



ウルスラ

誇り高く美しい女騎士。
騎士団を率いる、王太子
フィリックス腹心の部下
であり、幼馴染みである
最愛の女性。



インテグラ

ダリシン王国の姫で、フィ
リックスのお妃候補。物静
かでおとなしいが、スカー
トにナイフを忍ばせるミス
テリアスな美少女。



クシャナ

フィリックスの叔母にあ
たる人物。現在はダリシ
ン王国の王太子の妻。ス
タイリッシュな見た目と
豪胆な性格を併せ持つ。

フィリックス

元は騎士見習いであつた
が、数奇な運命に翻弄され
イシュタル王国の王太子
の座についた少年。



シャクティ

イシュタル王国のクーデターに参加していたが、フィリックスの説得に応じて部下となった軍師。飄々とした性格。



グロリアーナ

フィリックスの義母にあたる、イシュタル王国の女王。若くして未亡人となってしまったため、熟れた肉体を持って余している。

サーシャ

イシュタル王国の森林貴族の娘で、王太子付きのメイドの一人。フィリックスの側室になって気楽な生活を送るのが夢。

ルイズ

メイドのまとめ役であり、現在は政務補佐官も担当している才女。常に冷静沈着で、知性的な美貌の持ち主。

コーネリア

ヘルセボネ王国の王女で、フィリックスのお妃候補。剣術に長ける男装の麗人。ウルストラを「オネエサマ」と慕っている。

キャロル

いまは亡きイシュタル王国の宰相の孫娘で、フィリックスの世話をするメイド。見る者の保護欲をそそる。

マガリ

フィリックスと年齢に近いメイド。彼が騎士見習いをやっていた頃から惚れていたという健気な元気娘。実家は豪商。

ディアーネ

女王グロリアーナの異母妹。優雅な舞いを得意としており、しなやかで柔軟な肢体を露出の激しい衣装に包む。

第一章	叔母様
第二章	お姫様の英才教育
第三章	園遊会
第四章	思いがけない初陣
第五章	ダリシンの女帝
第六章	天上の花園

将来の夫とすべき男に優しく促されたインテグラは羞恥に震えながらも、股間を両手で押さえたまま膝立ちで進み、その顔に跨がった。

「はあ……ふう……はあ……ふう……」

一度貫かれていたとはいえ、ほとんど処女同然の女の子である。男の顔面に跨がるのは恥ずかしいのだろう。まだ発育途上の胸が大きく上下している。

そして、決意の表情とともに、十指をぎこちなく、股間から離れた。

タラタラタラタラ……。

粘着質な透明な液体が、糸を引きながら滝のようにダラダラと滴り、フィリックスの顔にかかった。

「ああ、わたくしつたら、これ、おしっこじゃありませんから……」

「わかってるよ。ヌレヌレのオマ○コを見て悦ばない男はいないから、安心して♪」
陰毛はあまりない。金緑色の陰毛があっさりと茂っているだけだ。

しかし、本人が気にするだけあって、愛液の分泌はかなりいいほうだろう。

（うわ、ダダヌレ。いつもクールな顔なのに、オマ○コは意外とだらしないんだ♪ こんなビチョビチョのオマ○コ初めて見た）

女性器というのは、顔や体型と同じで、人によって千差万別である。

インテグラの陰唇はとにかく液量が多いのが特徴のようだ。

フィリックスは両手を伸ばすと、左右の親指をぶつくりとしている陰唇に添えて、左右

に開いた。

さらに奥に溜まっていた雫が、ダラダラダラと降り注ぐ。

そして、綺麗なピンク色の媚肉があらわとなった。

「うわあ、インテグラのオマ○コって綺麗だ。まるで朝露に濡れた華みたいだよ」

「そ、そんな……」

以前にサーシャの陰唇を見たとき、女性器はグロテスクだとぼやいていたインテグラである。どうやら、自分の性器もあまり好きではないらしい。

「すっごく綺麗で美味しそうだから、もう我慢できない。食べたい、座って」

興奮したフィリックスは、眼前の腰を軽く引いた。

「あっ」

バランスを崩したインテグラは腰が砕けたようにして、フィリックスの顔面に座り込んでしまった。

そこで遠慮なく陰唇に吸いついた。

「そ、そんな……ダメ、汚い……ああ」

慌てたインテグラは腰を上げようとしたようだが、後の祭りだ。もはや媚肉を逃すつもりはない。容赦なく食った。

柔らかな船底をさらった少年の舌先は、媚肉の合わせ目を舐め穿る。

（インテグラのクリトリスって小さいなあ。包皮の中から引っ張り出すのが大変だ）

どうやら真性の包莖らしい。淫核も小さくて米粒ほどしかないようだ。こんな小さな淫核は初めて見た。

しかし、小さいからといって感度が鈍いというわけではないようだ。

「はあ、ああ、気持ちいい……。こんな気持ちいいなんて、ああ、わたくし……。恥ずかしい」

羞恥の心とは裏腹に、肉体は気持ちいいのだろう。白い頬を紅潮させたインテグラの小柄な肢体がビクビクと痙攣している。

(山椒は小粒でもピリリと辛い。そんな感じのクリトリスだな)

やがて肉体的な快感に堕ちた少女は、逃げるのを諦めて自らの快感ポイントを教えるように腰をくねらせ始めた。

「うふふ、インテグラよかったわね。好きな男の顔面に座って舐めてもらえるのは、女にとって至福の一時よ。フィリックス、いままで寂しい思いをさせたお詫びも兼ねて、舌が疲れて動かなくなるまで舐めてあげなさい」

叔母に言われるまでもなく、気負った少年は夢中になって同世代の少女にせつせと奉仕した。

(うゝ、舐めても舐めても液が出てくる。マン汁で溺死しそう)

嬉しい悲鳴を上げながらフィリックスが夢中になって舐めしゃぶっていると、恥丘越しに、柔らかそうな乳房が二つ、ぽよんぽよんと揺れているのに気づいた。

(あ……そういえば、まだインテグラのおっぱい触ってなかった)

パイズリはしてもらったが、まだ手では触れてない。その魅力的な美肉に向かってフィリックスは両手を伸ばした。

そして、掴む。

「あっ♪」

顔面騎乗の状態で、さらに両の乳房を捕らえられたインテグラはびくりと震える。

(うお、やっぱ柔らかい。それに大きすぎず小さすぎず、ちょうど掌サイズだ)

フィリックスは夢中になって陰唇を舐めしゃぶりながら、両手で乳房を揉みしだいた。掌にこりつとしたしこりを感じると、乳頭を人差し指と親指の先端で掴んでやる。

「あああ……」

性に慣れているとはとても言えない姫様は、失禁しているのではないか、と思えるほどの大量の愛液を撒き散らしながら絶頂した。

「あ、ダメ、果てる。果ててしまう。果てちゃう、果てまするう——ッ!!!」

インテグラらしくもない切羽詰まった悲鳴とともに、肢体を激しく痙攣させた。

ビク、ビクビクビクビク!

失禁していると思えない大量の愛液を撒き散らしながら、気高きお姫様は絶頂したようだ。

「まったく、この程度のことと感動しちゃうって、なんて健気な娘なのかしら♪」

おとなしく見物していたクシヤナの声にはいささか呆れの色がある。

※

「インテグラ、なにクンニされただけで満足しているのかしら。本番はまだまだこれからでしょ」

絶頂の余韻に浸る少女の背後からクシヤナが声をかけた。

「えっ?」

「こちらではおちんちんが完全復活しているわよ」

インテグラが背後を振り向くと、そこではクシヤナが逸物を掴んで扱っていた。

「あう、叔母上♪」

「まったく、我が甥ながらなんという絶倫チンポ。親族として恥ずかしいわ」

その甥の逸物を扱きながら言う台詞ではないと思う。

「インテグラ、あなたから入れなさい」

「インテグラは……」

フィリックスは慌てて身を起こそうとした。もちろん、セックスはしたい。しかし、インテグラは処女を卒業したとはいえ、それだけの経験しかない。

騎乗位よりは、フィリックスが上になって導いてやるべきであろう。

それをクシヤナは押しとどめた。

「性に慣れてないといっても、処女膜は取っているんですよ。なら問題ないわ。あたしが

腰の使い方を教えてあげるわ。インテグラ、あなた他の寵姫たちに負けたくはないでしょ」
甘栗色の瞳と緑の瞳が正対した。そして、インテグラは決然と頷く。

「はい」

フィリックスの顔面から身体を引いたインテグラは、そのまま腰を跨ぐ形となった。
いきり立つ逸物を自らの陰唇に添えられる。

「さあ、そのまま腰を下ろしなさい」

クシャナは左手で、フィリックスの逸物を立てながら、右手でインテグラの右肩を軽く押した。

「あ……ああ……」

いきり立つ逸物はズルズルと女唇に飲み込まれていく。

愛液が多い体質だからだろう。狭い膣穴でも潤滑油が豊富なため案外簡単に飲み込まれていく。

（これがインテグラのオマ○コか。顔に似て堅いから、こじ開ける感じがするんだけど、奥の奥までグッチョリ。こういうのをヌレマンとかいうのかな？）

感嘆しているうちに逸物は、湿度の高い肉洞に根元までずっぽりと飲み込まれてしまった。
「はあくん、お、奥に届いていますう」

身をのけぞらしたインテグラは大口を開けて喘いだ。その姿はもういっぱいいっぱいであり、とてもではないが自分から腰を振るう余裕はなさそうだ。

しかし、クシヤナは容赦なかった。

「それじゃ、始めるわよ。さあ、腰を使いなさい。ああ、上下に振る必要はないわ。基本は前後よ」

「は、い……」

王妃の指示に従って、健気な少女は必死に腰を前後させる。

グツチュ、グツチュ、グツチュ。

「はあ、凄い音が……は、恥ずかしい」

膣穴から鳴り響く粘着質な水音に、インテグラは顔を真っ赤にし、腰の動きを止めようとしたが、背後から抱き締めたクシヤナが許さなかった。

金緑色の長髪をした少女の腰を抱いて無理やり前後させる。

「セックスなんて、男と女が恥を晒しあう行為よ。自分のすべてをさらけ出しなさい。さすれば相手だって答えてくれるわよ」

「は、はい。わかりました……」

クシヤナの説得を受けてインテグラは必死に腰を使う。

「まだなっていないわ。もっと速く」

「はい。頑張ります」

仰向けになったフィリックスの上に跨がったインテグラの背後から腰を掴んだクシヤナが、腰使いを指導している。

グチヨリグチユリグチユリ……。

大量の熱い液体が肉棒にビュウビュウ浴びせられて、肉棒、肉袋、さらには肛門まで濡らされる。

「うっ、叔母上、ぼくもう……」

「ちよつと、フィリックス、あんたもう出すなんて言うんじゃないでしょうね。そんなじゃ興奮めよ。ドスケベならドスケベの気概を持って、死ぬ気で我慢しなさい」

「は、はい……」

射精しかかっていたフィリックスだが、叔母が怖いので必死に我慢した。

「ほら、インテグラも頑張りなさい。あなたのオマ○コが気持ちよくて、フィリックスはあんな情けない顔をしているのよ」

「はい」

二人の会話を聞いて、自分がどんなに酷い顔をしているのか気になったが、いまのフィリックスはひたすら射精を我慢することしかできない。

（こういうときどうすれば。あ、そうだ、全然関係ないことを考えれば。いまごろママはなにしているかな。ママと残ったみんなでレズ大会……うわ）

変な妄想したせいでかえって追い詰められた。

なにせいま逸物を包んでいるのは、十代のキツキツザラザラヌレヌレ腔洞であるのに、その腰使いは熟女の練達の技だ。

そんな攻撃に晒されて長持ちするほうが変わだ。

「も、もう……ダメ、で、出る」

世にも情けない悲鳴を上げて、フィリックスは屈服した。

ドブユ、ドビユユユユユユ!!!

「はあ、熱いのが、熱いのがお腹のなかにいいいいいい」

ビク、ビクビクビクビク……!!

フィリックスの射精に合わせて、クシャナに背後から抱き締められたインテグラも、泣きながら身を激しく痙攣させた。

二人は見事に絶頂をシンクロさせたのだ。

※

「ふう……まあ、こんなものかしら？」

射精して恍惚としているフィリックスに、クシャナが優しく質問した。

「どお、うちのインテグラは？ 奥手だけど、結構可愛いでしょ？」

「は、はい……」

フィリックスは全面的に同意して頷いた。

「この調子でインテグラのこと可愛がつてあげなさいよ。そうね、最低週ないがしに一回はインテグラとエッチすること。いい、インテグラは我が国の代表なのよ。それを蔑ろないがしにすることは、我が国を蔑ろにすることよ」



思わず右手の人差し指を伸ばして、沁みを押ししてしまう。

「あっ♪」

王座に座ったクシヤナの上体が、ビクンとのけぞる。

「これ、脱がしますよ」

「ええ、お願い」

両手を伸ばしたフィリックスは、黒いタイトなスパッツの両脇を握った。

クシヤナが両手を肘かけに置いて、腰を上げてくれたので、一気に太腿の半ばまで引き下ろす。

白いTバックショーツに包まれた小尻があらわとなる。ぴったりしたスパッツを穿いているので、ショーツの線を出すことを嫌ってこのような過激な下着となったのだろう。まるで禪ふんどうしのようなショーツだ。

（年齢はママと同じくらいなのにお尻の大きさがまるで違うな）

スパッツを脱がしきるまで我慢できなくなったフィリックスは、太腿の半ばで手を離し、狭間に顔を入れてしまう。

「あ、こら……」

せつかな甥っこの行動に、クシヤナは慌てたような声を出したがむろん、怒ってはいない。

フィリックスは遠慮なく白い紐パンを脱がせた。

(うわ、ぐつちよりだよ)

メラリと透明な液体が糸を引きながら、薄手の股布が股間から剥がれる。

頭髪と同じ甘栗色の陰毛は、手入れがされているのだろう。綺麗に整えられていたが、ふわふわの陰毛が立ち上がった。

その奥で肉裂はびつちりと閉じていたが、狭間からグチュグチュと透明な液体を垂れ流している。

「すごい、大洪水じゃないですか。叔母上の下半身も結構だらしなと思います」

「ま、まあ、よく濡れるのはイシュタール王家の血つてことかしらね」

澄ました顔で答えたクシヤナだが、頬が紅潮しており、少し動揺しているのが感じられる。

フィリッククスは両手の人差し指と親指を伸ばすと、大陰唇の左右にかけて、四方に開いた。

「ああ……」

さすがのクシヤナも、羞恥に満ちた熱い溜息をつく。

陰核はもちろん尿道口、膣穴まで、魔法光に丸晒しである。

「叔母上のオマ○コ……。ここからカプラン王子が産まれたのか？」

思わず漏れたフィリッククスの呟き、いつの間にか背後に忍びよっていた女たちも神妙な顔で覗き込んでいる。

「……不思議ですわね」

インテグラが心底不思議そうに呟き。

「こんな小さな穴から、赤ん坊が出てきたなど、とても信じられんな」
ウルスラは驚嘆する。

「まさに女体の神秘ですわね」

シヤクティは腕組みしてうんうんと頷く。

「わたしもいつか、フィリックス様のお子様を、キャッ♪」

サーシャは頬を押さえて身悶える。

未だ出産経験のない女たちには、経産婦に対する憧れがあるようだ。

「あなたたちも、そのうち、この子の子供を産むつもりなんでしょうけど……。性器を晒しものにされるといふのは、結構、恥ずかしいわね」

「すみません」

四人の女たちも我が身に置き換えて考えたのか、慌てて咳払いなどをして視線を逸らす。そんな中で、フィリックスは、叔母に念を押した。

「舐めますよ」

「いいわよ。好きにしなさい」

クンニしやすいようにとの配慮だろう。クシャナは左足を上げて、踵を王座の肘かけに置いた。

そこでフィリックスは、舌舐めずりを一つして、叔母の陰唇へと顔を突っ込んだ。ペロリと舐めると、口内に甘酸っぱい味が広がった。

(これが叔母上の愛液の味か！)

いままで多くの美姫の愛液を味わってきたが、血が繋がった叔母のものだと思つたとまた、えもいわれぬ甘美で享樂的なものを感じた。

まだ年若いフィリックスは酒の味など知らないが、極上の香草酒の味わいとか、喉ごしとはこういうものなのではないか、と思つたほどだ。

ピチャリピチャリピチャリ……。

子猫がミルクを舐めるような真摯さをもつて、叔母の生殖器を隅々まで舐め回す。

「はあ、ああ、ああ、ああん……」

単に甥っこにクンニされているだけではなく、年若い同性たちの晒し者になっているクシヤナは、右手の親指を噛んで、喘ぎ声を我慢しようとしたようだが、甘く鼻にかかった嬌声を漏らしていた。

不意にフィリックスとクシヤナの目が合った。

「なに？」

「いや、叔母上でも、オマ○コ舐められると気持ちいいんだなつて思つて」

「当たり前でしょ」

頬をかっつと赤くしたクシヤナは、ちよつと怒つたように応じた。

「ごめんなさい」

陰核を包む薄皮はひとりでにめりめりと剥けて、中身が小さな角のように尖る。そこを舌先で弾くと、よい声で鳴くが、それよりも膣穴のほうが感じるようだ。

それと悟ったフィリックスは剥き出しの淫核に鼻の頭を当てるようにして、膣穴に思いつきり舌を押し入れて、グリグリと回転させる。

「あ、はあああああ!!! ちよ、ちよつと、凄いい!」

膣穴を高速で舐め穿られたクシヤナは、口唇と両目を開いて涎を噴いた。

「い、いい……、いく、いく、いく、いく、いつちゃう! いくううううう!!!」

ブル、ブルブルブル……!

王座に座るクシヤナの肢体が激しく痙攣した。特に肘かけに置かれた左足がビクンビクンと跳ねる。

クシヤナが絶頂したことを見て取ったフィリックスは、口を離した。

「はあ、はあ、はあ、まったく、舐め犬として鍛えられているわね」

胸を大きく上下させながらもクシヤナが落ちついたところで、フィリックスは立ち上がり、いきり立つ逸物を握り締めながら訴えた。

「叔母上、もう、入れていいですよね」

「ふふ、まったくほんと、我慢のきかないおちんちんね。ええいいわ」

王座から身を起こしたクシヤナは、フィリックスに背を向けると、左肘を座面に乗せて

バランスを取りながら、尻をフィリックスのほうに差し向けてきた。

そして、股の間から右手を入れると、細くて長い指先で陰唇を開いてみせる。

「さあ、好きにしていいわよ」

その挑発ポーズに、フィリックスの脳天は焼かれた。

（叔母上のアナル丸見え♪）

どんな美人でも肛門があるのは当然なのに、それを見るとなぜか驚いてしまう。

その下に開かれたぬらぬらと濡れ輝く陰唇。そこから見えない磁力が出ているかのように、フィリックスは逸物を近づけていった。

ヌチャツ。

先端が触れた。

（叔母上のオマ○コに入れる。それも人妻に）

背徳感で胸が張り裂けそうなフィリックスだが、逸物のほうは常以上の勢いでいきり立っているように思える。

（ぼくって、なんでこんなに節操なしの女好きなんだろう）

自己嫌悪にすら陥るが、極上の美肉を前に食べないという選択肢は、どうしても選べない。

自他ともに認める未熟な少年は、恐る恐る腰を進めた。

「あっ♪」

龟头部がゆつくりと熟れた肉壺に飲み込まれていく。
先端さえ入ってしまったえば、あとは道なりである。

(もう、我慢できない)

異様な興奮に晒されたフィリックスは、突き出された小さく引き締まっている尻を両手で掴むと、逸物を一気に押し込んだ。

ズブ、ズブズブズブズブ……。

柔らかい贅肉を掻き分けながら肉刀は押し進み、ついには根元まで突き刺さした。

(や、やっちゃった。叔母上の中にちんちん入れちゃった)

肉親を犯してしまった罪悪感と背徳感に震えるフィリックスだが、同時に背中が燃え上がるほどの興奮を味わった。

「どうかしら？ あたしの中、気持ちいい？」

「き、気持ちいいです。すごい、とっても！」

フィリックスが経産婦の女性とセックスしたのは初めての体験だった。

(子供を産むと、オマ○コが緩くなるって話を聞いたことあったけど……そんなことないな。き、気持ちいい……)

もちろん、出産する前のクシヤナの膣洞の具合など想像することもできないが、現在の膣洞が素晴らしいということは論をまたない。

逆に女性は子供を産んで初めて完成する、という言葉もある。

(ウネウネと貝舌みたいな髪が絡んできて気持ちいい)

巾着型というのだろうか。入口がきゅっと締まって、奥では柔らかな贅肉に包まれる。このままでは逸物が消化され、溶けてなくなってしまうのではないか、という不安に駆られるほどの気持ちよさだった。

「あ、あのぼくのおちんちんは？」

「はあ、まだ小さいけど、カチンコチン……はあ、これが甥っこのちんちんか……なかなか悪くないものね」

陶醉した様子でクシヤナは、甥の性器の食い心地を堪能している。

フィリックスのほうにはそうやってゆっくり味わう余裕はなかった。

「お、叔母上、動きますよ」

「ええ、思いつきり動いていいわよ。ただし、あたしを満足させることができずに出したら、これから公文書には、あなたのことを早漏王子と書くことにするわ」

冗談だとはわかってているが、自他ともに認める早漏ぎみの王子様は青ざめた。

(絶対、満足させないと……)

そういう焦りを感じたフィリックスだが、ここは肉棒一本で叔母との真っ向勝負をしたくなった。

細い腰を捕まえると、ゆっくりと腰を前後に動かす。するとクシヤナから叱責が飛んだ。「なに若い子がそんな遠慮しながら動いているの、ガンガン来なさい」

発破をかけられたフィリックスは、慌てて腰で激しく掘削させた。

グッチュグッチュグッチュ。

よく濡れた肉壺に肉棒が入るたびに、愛液が噴き出し、引き抜くたびに飛沫が出る。

しかし当然のことながら、激しく掘削すればするほどに逸物への負荷もきつくなり、射精欲求は高まる。

「もつとよ、もつと激しく！」

「はいっ！」

フィリックスは奥歯を食いしばり、逸物の先端の尿道に意識を集中して、なんとか暴発させないように気を遣いながら、あらんかぎりの力で突撃と退却を繰り返した。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

女の尻と男の腰がぶつかり派手な音をする。

「ああ、いい感じよ。ああ、そんな感じでもつと速く」

「え、で、でも、これ以上速くしたら、その……で、出ちゃう」

切羽詰まった少年の泣き言を、王妃様は一蹴する。

「我慢しながら激しく動く。いい、あたしがいいって言うまで出したらダメだからね」

「はい！」

おっかない叔母の無茶な命令に、フィリックスは半べそをかきながら従った。力の限り腰を叩き込みながら、必死に射精を我慢する。

「あつ、あつ、あつ、いい、いい、いいわ！」

「叔母上、も、もう……」

「まだダメ、我慢おし。だからって腰止めたらダメ、激しく！」

叔母の叱責に承えて、フィリックスは奥歯を噛み締めて必死に腰を振るう。

寧ろから噴き出した精液が、肉棒を駆け上がり先端まで詰まっている気がするが、それを根性で留めながら、夢中になって腰を振るう。

先端から噴き出ることのできない精液が、汗となって噴き出しているかのように、フィリックスの全身はぐつちよりと濡れた。

「ああ、いいわ。お子様ちんちんが中でどんどん大きくなっていく。ああ、いい、子宮口まで届いている♪ 届いているの♪」

クシャナは単に快感に悶えて実況しているわけではないだろう。周りの若い女たちを挑発して楽しんでるのだ。

「もう出る！」

「もう少し！」

その問答を何度繰り返したことだろうか。フィリックスは逸物の神経が焼き切れて溶けてしまったような気分を味わった。

そんなときようやくクシャナの返答が変わった。

「いいわ、いきなさい。いくいくいくいくイク——っ！」

クシヤナの許可をもらったのとほぼ同時に、逸物は爆発した。

ドビュ、ドビュ、ドビュ、ドビュ、ドビュ、ドビュ!!!

「ああ、凄い。きた、きた、きた、きた!!!」

若い牡の精液を膣内に浴びせられたことで、クシヤナもまた一段と高いところで享樂の門を突破しようだ。

膣洞がキュンキュンと締めているだけでなく、そのスレンダーな背中が痙攣している。

(さすがは叔母上、セックスまで格好よく決めたなあ)

女主導のセックスとはかくあるべきと言いたくなるようなスマートなイキっぷりである。思う存分に精液を吐き出したフィリッククスは、精根尽き果ててクシヤナの背中に沈んだ。

「はあ……、はあ……、はあ……なかなか悪くなかったわよ」

「ありがとうございます」

絶頂してもどこまでもカッコイイ叔母は、身をひねって軽くフィリッククスの頬に接吻してくれた。その拍子に、又チュツと小さく萎んだ逸物が抜けた。

次いで、栓を失った膣穴からはドボドボドボ……と滝のような精液が溢れ出す。

「あーあ、こんなにいっぱい出しちゃって♪」

呆れたような溜息をついたクシヤナだが、股間に手をやって、溢れ出す白濁液を掬い、ペロリと舐めた。

「二発目だつていうのに濃厚ね」



「はあうん。き、気持ちいいですわ」

「うん、ぼくも気持ちいい」

顔と同じで、膣洞の形もさまざまだが、ディアーネの膣洞の内部構造は特に個性的だ。

入口と半ばと奥という三か所でキュツと締める三段締めオマ○コなのだ。

「あ、嬉しいですわ。やつぱり、あたくしとフィリックスさんは相性がぴつたりなんですわ」

かつては三日三晩、肉欲に溺れた仲である。ディアーネのイかせ方は、なんとなく心得ているフィリックスは、膣洞の腹部側を擦るようにして、リズミカルに腰を叩き込んだ。

グツチュ、グツチュ、グツチュ……。

「あ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい。も、もう、イきますわ」

「いいよ、思いつきりイって」

「ああ、あああああああ」

キュンツ、キュンツ、キュンツ、キュンツ……！

三段締め膣洞が、心地よく逸物を締め上げてきた。

（あ、すげえ気持ちいい、やつぱりディアーネのオマ○コって凄い）

三日三晩。我を忘れて肉欲に溺れてしまった過去の自分の気持ちがよくわかる。

つられて射精しそうになったフィリックスだが、ここでもなんとか耐えきった。

「あん、あたくしにもお情けはいただけませんでしたの？ く、悔しいですわ。もう一発」

騎乗位になって得意の荒腰を披露しようとするディアーネを、フィリックスは慌てて押さえた。

「ダメだよ。みんな平等に愛したいし」

「もう、フィリックス様だったら、ときどきとつてもいけずですわ」

「ごめんね。埋めあわせはあととするから」

涙目になっているディアーネの頬に軽くキスをしてから、フィリックスは逸物を引き抜いた。

隆隆といきり立つ、濡れ輝いた逸物を前に、残りの女たちが生唾を飲む。

「では、だれに出して頂くか勝負ですわね」

「ええ、絶対にわたしの中で、殿下に参ったと言わせませすわ」

射精しないで女たちをイかせていこうというフィリックスの企みを知った残りの女たちの対抗意識に火が点いてしまったらしい。

このような極上美女たちが、こんなにも自分の逸物に飢えていてくれたかと思うと、男冥利に尽きる。頑張つて全員を満足させたいと思う。

「ま、負けないぞ」

気合いを入れたフィリックスは、極上美女美少女の躍り食いを始めた。

(で、出る。でも、一人に出したら全員に出さないと不公平だよな。我慢しなくちゃ。ああ、でもなんでこんなにみんなオマ○コまで個性的で、どれもこれも気持ちいいんだ)

なんとも贅沢な試練に挑むフィリックスは、叔母からの訓練の賜物か、なんとか暴発だけは免れながら、夢中になって腰を使い続ける。

(こんなに綺麗で素敵な女性たちがぼくの妻なんだよな。それなのに浮気するなんて最低だ)

容姿がみな違うように、膣洞の作りもみな違う。だから、飽きるということはなかった。

「ああ、イキますわ、イキますわ、イキますわ」

「ああ、凄い、前回よりも感じてしまってます」

シエルファニール王国の宰相の娘にして、清楚可憐な美人エロイーズや、クレオンレーゼの古風なお姫様。

「ひい、ひい、ひい」

いずれもいかにもお姫様といった気品のある方々なのに、逸物を叩き込まれると、瞳は裏返ってしまい、だらしなく緩んだ口元からは涎が垂れて、細い顎を濡らしてしまっている。

(こんな知的で清楚なお姫様でも、おちんちん入れられたら気持ちいいんだよな)

普段の楚々とした佇まいからは、セックス時のあられもない表情などまったく想像できない。まさに役得だ。

「次はルイーズだよ。それからキャロルに、マガリ。絶対に全員を満足させるからね」

侍女として仕えてくれる身近な姫君たちを犯し、さらには外遊をともしたウルスラ、

シャクテイ、インテグラ、サーシャとまで交わった。

まさに女体の神秘。男にとって飽くことなき探究の対象だ。

フィリックスは、それを夢中になって堪能した。

※

絢爛豪華な花園を思いのままに踏みにじったフィリックスは、最後に残った大輪の花に歩み寄った。

「全員、満足させたの？ 坊やってば凄いわね」

フィリックスの女性のあしらいを徹底的に教え込んだのはグロリアーナだ。しかしながら、現在繰り広げられた惨状を目の当たりにして、若干畏怖したように額に冷汗を浮かべている。

「はい。最後はママです」

「うふふ、わらわはいいわよ。みんなで楽しみなさい」

「ママとやりたいんです。そのために我慢しました」

十人を超える乙女を貫いた逸物は、いまにも暴発しそうにビクンビクンと脈打っている。その光景を目の当たりにして、グロリアーナの紫水晶のごとき瞳が油でも差されたように妖しく光る。

「うふふ、嬉しいこと言ってくれるわね」

「それじゃ」

「いいわよ。わらわは坊やのためならなんでもしてあげちゃう。坊やのおちんちんで、満足させて♪」

椅子に座って寛いでいたグロリアーナは、その場で大股を開いてみせた。

「はい。ママ」

色気の塊である義母の陰唇に、若い娘たちの愛液で濡れた逸物が叩き込まれる。

「あん♪ す、凄い。少し見ない間に、また大人になった感じ♪」

グロリアーナは大人の余裕といった態度で、フィリックスの両肩を抱いて溜息をつく。

そのさまにフィリックスは少しカチンときた。

(ママを身も世もなく乱れさせたいな。ママがかつて感じたことのないような最高の快感に誘いたい。でも、激しくするだけじゃ芸がないよなあ。そうだ、いいこと思いついた)

名案を思いついた気分になったフィリックスは、勇躍グロリアーナのお尻に両手を回し、握り締めるとそのまま立ち上がった。

「ああ、坊やったら逞しい」

グロリアーナは歓喜して、フィリックスの首っ玉にしがみつく。

対面の立位。『やぐら槽立ち』の体位だ。

逸物一本で串刺しにされている気分であろう。

「ママ、いまから、ママが経験したことのないような体験をさせてあげます」
勇ましく宣言したフィリックスは、義母を抱いたまま歩き始めた。

「ちよ、ちよつと何をするつもりなの？」

驚くグロリアーナを他所に、フィリックスはテラスの入口、すなわち塔の下の階に続く階段へと近づいた。

「いきますよ」

「えっ」

ドスン！

フィリックスは一段降りた。それだけなのに、驚いたグロリアーナは紫水晶の瞳を剥いて、必死にフィリックスの首つ玉にしがみつく。

「ひい、いま刺さった。ゴリつて、坊やおちんちん刺さった！」

フィリックスの逸物は年相応であり、決して巨根というわけではないが、振動で大きく沈んだようだ。

確かに先端に、ゴリつと子宮口を刺した感じがある。

「へえ、やつぱり効くんだ。それじゃママ、いきますよ」

「ちよ、ちよつと待って。ま、まさか、ひいひい!!!」

トン、トン、トン、トン、トン……。

義母を抱き締めたフィリックスは、軽やかに螺旋階段を降りていく。

「ひいあ、ダメ、ダメ、ず、ずい……、こんな、ひい」

一突きごとに最深部を突かれて、グロリアーナの目からは涙が流れ、だらしなく開かれ

た口元からは涎が溢れている。

(よし、効いている、効いている。ママってばすっかりアへ顔だ)

普段は、見ているだけで寒気がするほどの麗容を誇る美女も、こうなってはすっかり台なしだ。

「死ぬ、死ぬ、死ぬ、死んじゃう。気持ちよくて死んじゃう」

義母の悲鳴に気をよくしたフィリックスはどんどん階段を下りていく。

(よし、トドメ)

下階まであと三段となったとき、フィリックスは義母を抱えたままジャンプした。

ドス——ンッ!

フィリックスは両足で踏ん張る。

「ヒイヒイヒイヒイヒイ——ツツツ!!!」

亀頭部が子宮口を突破してしまったのではないかと、と思えるほどに奥深くまで突き刺さった。

(あ、限界……でるうう)

ドビュビュビュビュビュビュ!!!

十人を超える女たちとの交わりで溜まりに溜まった精液が、直接、子宮内に流さされていくかのようだ。

「はわあ、あわ、はああああ……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索

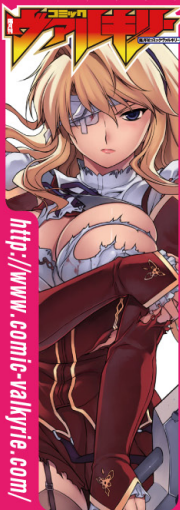


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!